



**A Study of Tricolored Glaze and Green Glaze from  
a Viewpoint of Scientific Research**

**高橋照彦**

- ① 三彩・緑釉陶器生産の概要
- ② 三彩・緑釉陶器の自然科学的研究の現状と課題
- ③ 鉛同位体比分析の対象資料
- ④ 鉛釉の鉛同位体比分析の結果とその考察

結語



本稿は、日本の三彩・緑釉陶器についての理化学的分析結果を検討し、そこからその歴史の意味を見いだそうとするものである。主な検討結果は、以下の通りである。

まず、奈良三彩・平安期緑釉陶器では、いずれも釉薬の鉛同位体比がほぼ集中する値を示し、古代銭貨の多くや古代鉛ガラスとも一致し、山口県の長登周辺産の鉛を用いていたことが明らかとなった。また、釉薬の化学組成には、産地差が存在し、年代に伴って変化していることも指摘できた。

さらに、鉛釉（鉛ガラス）の原料調達の変遷については、次のような段階設定を見いだすことができた。

- I 段階（7世紀第3四半期頃の短い期間） 海外産鉛原料による国内生産の段階。
- II a 段階（7世紀後半～8世紀初め頃） 長登鉱山を初めとする国内各所の鉱山から原料供給を受けて、生産地の方鉛鉱を直接粉碎して釉（あるいはガラス）原料にする段階。
- II b 段階（8世紀前半～9世紀初め頃） 長登鉱山周辺から方鉛鉱あるいは金属鉛の供給を受けて、生産地で鉛丹を製成して釉（あるいはガラス）原料にする段階。
- II c 段階（9世紀前半～12世紀前半頃） 長登鉱山周辺などから産出された鉛原料をもとに鉛丹あるいは鉛釉フリットなどが製成され、その供給を受けて釉（あるいはガラス）を生産する段階。
- III 段階（12世紀後半頃以降） 対馬の対州鉱山などから鉛ガラス原料の供給を受けて生産する段階。